

「底が突き抜けた」時代の歩き方 282

アメリカ国内で袋叩きに遭うスーザン・ソントグ

作家の高橋源一郎は、同時中枢テロに作家はどうして小説をもって向き合おうとしないのかを問い、思想家の吉本隆明は、物書きは自分の設定したテーマの外側から不意に突っ込んでくる同時中枢テロのような問題に、「こう感じた」ということを間違ってもいいから言ったほうがいいと説いていた。そこに共通するのは、自分の不得意な領域であれ、いや、不得意な領域だからこそ、避けがたく突出した問題の渦中に言葉で飛び込み、格闘すべきであり、そのような格闘を避けるなら、文学（言葉）はもはやどこにもあらわれようがないのではないのか、という思いであろう。文学（言葉）はなににも見えてこない暗中で必死の手探りではないのか。そこで無数に負う生傷こそ、まだ出現していない文学（言葉）の未知の種子を宿しているのではないか。彼らの発言に向き合っていると、そう思われてくる。

もう一つ、大事なことは後追いをするなということだ。いま自分がなににも見えてないなかでこそ、なにかをいってみるという言葉の気概をたえず磨いておけ、ということである。そこで言葉が致命傷を負ってしまうなら、それはもう仕方がないことだ。致命傷を負うぐらいのところまで深入りしなければ、なににも掴み取ってくることはできないのも自明の理である。しかしながら、後追いをせずに、いまここでなにかを発言しなくてはならないという切迫感を帯びた言葉は、かけがえのない、そのときにしか生み出されることのない新鮮な水滴のようなものであるとしても、後になってしか見えてこない、気づかないということも当然起こってくる。後追いをせずに語ることは非常に大事だが、後になってしか見えてこない問題を注視することも大事であろう。後になにを語るかによって、誰もまだ語っていない突端に押し出されることもありうるからだ。

そんなことを考えていると、作家のスーザン・ソントグの「わたしは「裏切り者」か」と題された発言（『すばる』02・1）が、こちらに飛び込んできた。彼女はベトナム戦争やボスニア戦争の際でも、つねに戦争の真っ只中に降り立って、渦中に身を晒しながら、「こう感じた」ことを歯に衣を着せずに発信しつづける、気骨ある見上げた女性の思想家である。当然、今回の同時中枢テロについても、彼女はすぐさま「こう感じた」ことを発表した。マンハッタンの自宅に電話して、《一連の論争について、ブッシュの戦争への奮闘について、国をあげての同調キャンペーンにメディアが身を任せていることについて》、68歳の彼女へのインタビュー（オンライン雑誌「サロン」編集長

デイヴィッド・タルボット 青山南訳)を行ったその前文に、彼女についてこう紹介されているので、そのままここに転載してみる。

《スーザン・ソントグは、これまでの40年間、たくさんの文章を発表してきた。歴史小説とか、ガンや写真やボスニアの戦争についての考察とか。しかし、『ニュー Yorker』の9月24日号の1000語にも満たない短い文章が、彼女の人生で最大の騒ぎをまきおこした。9月11日のテロ攻撃の直後に書いたもので、テロの暴力のあとの数時間テレビにあふれた政治家やメディアの戯言をばっさり斬ったのである。彼女言うところの「CNNの過剰服用」の結果、冷酷無比な怒れる分析の炎と化したソントグは、みなさん、だいじょうぶです、テロリストはただの腰抜けです、と繰り返す政府首脳やメディアのお偉方の発言に噛みついた。われわれの子どもっぽい世界観に問題はない、とかかれらは言いつづけている、と。

図星をつかれたかのように、口の悪い評論家たちがいっせいに怒りのコーラスをあげてソントグに襲いかかった。気休めになる聞き飽きた台詞をいっしょに並べようとしないうちに憤激したのである。ソントグは「アメリカ嫌い」とか「道義心のないバカ」と呼ばれた。「裏切り者」なのだから「荒野」に放り出してしまえ、話を聞いてやる必要などない、と言われた。血気盛んな右翼は、お馴染みの左翼の平和軍団といっしょくたにしてしまおうとした。左翼の型通りの平和主義は最近の政治論議ではすっかりお呼びではなくなっている。しかし、そういう色付けはうまくいかなかった。思想家として、ソントグはきびしく、ときにはぶしつけなくらい、独立しているからである。左翼をも右翼をも怒らせてきた(政治用語はますます無用の長物になってきた、と彼女は指摘する)。1980年代のポーランドの造船所労働者の決起のさいは共産主義を「人間の顔をしたファシズム」と呼んで攻撃して、また、セルビアの独裁にアメリカが空爆を加えたときはそれを強力に支持して、何人かのイデオログと袂を分かった。》

スーザン・ソントグのエッセーについては、作家の辺見庸も『サンデー毎日』(01・11・18)の連載時評で、こう触れている。《のっけから、政治指導者やテレビ・コメンテーターらの「独善的たわごと」や「公然たる人騙し」をやりだまにあげ、連中はテロ攻撃を「卑怯」などというが、この言葉は、自爆攻撃者ではなく、報復の範囲を超えて空爆をする者らを形容してこそ、より適切なのである - と、挑発的だ。そして、旧ソ連共産党大会恒例の「満場一致」は軽蔑すべきものだったけれども、9・11以降の米政府当局者とマスメディアの協調関係だって、事実隠しのレトリックにいたるまで一致している、とソントグは怒り、これは「成熟した民主主義」の名に値しないと難じている。

読んで、ま、小気味はいいのだが、『ラディカルな意志のスタイル』や『ハノイで考えたこと』(いずれも1969年)の著者であることを思えば、とくに、驚くにはあた

らない。米国内でも、またソントグがソントグらしく吠えているという程度に受けとめられているのだろう、と私は想像していた。ところが、やはり、時代がちがうのだ。彼女はいま、この「ニューヨーカー」のエッセイがもとで、かつてない袋叩きに遭っているらしい。右派系メディアから「国賊」呼ばわりされ、ある雑誌からは、ウサマ・ビンラディンとサダム・フセインとソントグは同類か、などと書かれた。また、インターネット情報によれば、彼女を「フィフス・コラムニスト」と呼ぶ者もいるのだという。これは、五番目のコラムニストという意味ではない。「第五列」、つまり内通者を意味する。いやはや、なんとも古い言葉なのである。

「フィフス・コラムニスト」を、日本語では、そのまま「第五列」という。いまでも広辞苑に載っている言葉だけれど、もう死語だろうと私は思っていた。スペイン市民戦争（1936～39年）で、フランコ將軍麾下（きか）のモラ將軍が四つの部隊を率いてマドリードを攻めたが、フランコ派が密かに同市内に潜んでいて、モラ將軍の部隊に内応していたことを指して、その内通者を第五番目の部隊、すなわち「第五列」と呼んだのである。米国のアホな論者は、テロリストと内通する国内の「第五列」であるというレッテルを彼女に貼ろうとしたわけだ。いかに罵倒されようとも、どうやら彼女は意気軒昂であるらしく、このままいったら米国は「警察国家」になってしまうと警告したりしている。同感である。

とまれ、「第五列」という陰湿きわまる言葉は、第二次大戦後、米国でマッカーシズムが吹き荒れたときに、多く用いられたのではなかったか。1950年2月、国務省内にいる共産党員の工作により、米国の外交が損害をこうむっているとして、マッカーシー上院議員が“赤狩り”を提唱し、政界だけでなく、思想、文化・芸術界での異端排除がはじまった。そのさい、外国共産党の「第五列」というでたらめなレッテルを貼られ、多くのリベラルな人々が職を追われた。その精神的傷は、いまでも映画界を中心に癒えずに残っているのだが、そういえば、米国社会はいま、まるでマッカーシズム再来といった雰囲気ではある。ハリウッドが政府の意を受けて、当局の政策にとって都合の悪い映画の公開を控えてみたり、政府に批判的なテレビ・コメンテーターが番組を降ろされたり、反戦・厭戦的な歌の放送を自粛してみたり、ベトナム戦争でも湾岸戦争でもなかったような統制と言論抑圧がはじまっている。アフガン報復戦争と炭疽菌騒ぎが拡大するなかで、米国は、ソントグの懸念するとおり、ますます警察国家と化しつつあるようだ。

じつのところ、私は、ソントグがコソボ紛争のときに、NATO軍の空爆ばかりか地上軍動員まで訴えたことに、つよい疑問を抱いたことがあり、不信はなお消えていない。だが、いま米国内で袋叩きに遭っていると聞けば、彼女に味方したい気分にもなる。スーザン・ソントグは、セルビア軍包囲下のサラエヴォで、『ゴドーを待ちながら』の演

出をしたこともある勇気の持ち主だから、味方なんかいらないうけけれども。》

ソングは長編『In America』でピューリッツァー賞を獲得したほどの作家だが、彼女にしてからが、こんな袋叩きの状態なのである。彼女はインタビューでこう語っている。《「ニューヨーカー」のあれは、9月11日の攻撃の文字通り48時間後に書いたものです。あのときはベルリンにいて、48時間ぶっ通しでCNNを見てました。まったく、CNNの過剰服用です。そこで耳にしたナンセンスの数々に当惑したから、それをぶちまけたんです。みんながたいへんに苦しんでまごついて恐怖をかんじていることは、もちろんわかりました。でも、思ったんです、「あーあ、冷戦のレトリックがまたもどってきた、自分たちに都合のいいきれいごとだけをならべている、これではうまく対処のしかたも生まれようがない」ってね。わたしのなかに生じた恐怖を言わずにいらなかった。》しかし、《じぶんのエッセイについては、ラディカルだとも論争を挑んだもの》でもなく、《とても常識的なものだと思います》っていたのに、《それが猛攻撃をうけてびっくり仰天です。》

彼女は、《わたしたちを批判している連中は、わたしたちにある程度の影響力があるから、怒り狂っている。ところが、「擁護者」はとんでもないことを言う。「まあ、放っておけ。あのひとたちもよくわかっていないんだよ」みたいなね。》と語り自分の考えをこう吐露する。《まず、アメリカ帝国のほうが、友人のクリス・ヒッチンズが言うところの「イスラム・ファシズム」の帝国よりはましだとわたしは思ってます。この敵とたたかうことには反対じゃないんです……これは敵ですよ。わたしは平和主義者じゃありません。/ 9月11日のことはとんでもない犯罪だと思っています。いちいちそう言わないと、わたしがそういう気持ちだってことがわかってもらえないのがおどろきです。でも、また戦争をすることが得策だとは思いませんね。》

「ニューヨーク・レヴュー・オブ・ブックス」に書いたスタンリー・ホフマンの《意見にわたしは全面的に賛成です。かれは、アフガニスタン爆撃は解決にはならない、と言っている。中東がどういうことになっているのかを理解し、どうすべきか、外交を考え直さなくてはいけない》、パレスチナ問題についても、《もしも明日にもイスラエルが西岸とガザ地区から一方的に撤退して……わたしは大歓迎ですが……パレスチナ国家の建国宣言がおこなわれ》ることを信じる彼女は、アメリカが《イスラエル支持を今晚やめたとしても、今回のような攻撃が終わることはない》と考えており、今回の問題は《アメリカは無宗教の罪深い国だからやっつける》というジハード（聖戦）にほかならないと指摘する。

外交を考え直し、「成熟した民主主義」へと自らを開いていくのとは反対に、テロリストたちと同水準でのアフガン爆撃を行使するブッシュ政権のメディア・コントロールに、彼女がとりわけ批判的なのは、アメリカ人が初めて味わう「恐怖」に政府が付け込

み、人々の自由を縮小していこうとしているからだ。

《まあ、みんな、すごく恐いんですよ。アメリカ人は恐いという状態に慣れていないんです。アメリカは例外だという考え方がありますから。よその国にはつきものの混乱やテロや政情不安からは免れているというような。ところが、ここにきて、みんな、恐くなった。興味深いのは、みんながたちまちのうちに反対方向に向かいはじめたことです。いまだよっている気分は、いろんなひとがそう言っているのを聞きましたが、イスラムのタクシー運転手や店主やその他もろもろのひとたちについては、とにかくムスリムは追放しようというものです。もちろん、みんながテロリストではないから、それには不当なところもある。でも、自分たちを守らなければならないではないかというわけです。人種や民族による区分けが常識になっている。それが当然だろう、というのがいまの雰囲気です。飛行機に乗っても、隣の席がターバンにヒゲの男だったらいやだろうというような。

わたしが恐れているのは、またテロの攻撃があることです……封筒に粉がはいっているといったたちの悪い冗談のようなものではなく、もっとたくさんの人命を奪う、もっとプロフェッショナルな、考えぬかれたもの。(中略)そんなことが起きたら、戒厳令のようなものがしかれるかもしれない。》

そんな「恐怖」の中で、《ビン・ラディンとアルカイダのビデオによる声明をテレビは流さないようにという要求について》、彼女は《あんなテープ、だれだって、オンラインで、海外のテレビ・ネットワークで見られる》のに、《馬鹿げた話》と批判する。《あの「原始家族」みたいなセットのなかでポーズをとって、右のじゃなく左の耳たぶをひっぱることで》、ビン・ラディンが海外のスパイたちに《秘密のシグナルを送っている》ということをして誰が信じるのか、単に彼らのメッセージを無料で流させたくないだけではないか。また自己検閲の想像以上の広がりについても、《ワールド・トレード・センターのおぞましい写真はもう載せないっていったいだれが決めたんですか？ どこから指示があったとは思えない。すごい合意があったんだと思いますね。メディアの重役たちによる一種の自己検閲です。あての写真は国民を意気消沈させることになるだろうという。》と批判の矛先を向ける。

テロリズムへのたたかいについての《わたしの立場は、ビスケットやピーナッツ・バターやジャムやナプキンや、テキサスの小さな町で製造したお菓子の詰合せ袋をアフガニスタンの市民に投下して、「ほら、ちゃんと人道的にやっているんだ」とか言うのはやめなさいというものです。あんな食べものの袋、グロテスクなまでに見当違いですよ……半日分くらいの食料にはなるんでしょうがね。でも、それをとりに飛び出していったら、そこは地雷原なんですよ。アフガニスタンは1人当たりの地雷の数が世界のどこの国よりも多いんです。それに、われわれの善意とやらをうけるひとたちにとって危険

きわまりないのは、薬の投下です。医者もいなければ、使い方もわからないんですから。あの素晴らしい組織の「国境なき医師団」は、やめろ、と批判しています。

うんざりさせられるのは、いわゆる人道的援助とやらが戦争を正当化するもの……隠蔽するもの……としてまたしてもつかわれていることです。》

このところほとんど姿を見せないチェイニーとラムズフェルド（国防長官）とパウエル（国務長官）によって運営されているように見えるアメリカの《政治がどんどん不透明になっていく》のを憂い、《どうして話し合いをすることが論争を挑むことになり、論争を挑むことが愛国心がないことになるのかという》ソントグは他方で、「タイムズ」をこう評価する。

《毎朝、わたしは涙を、文字通りの頬につたう涙を、「タイムズ」が載せるワールド・トレード・センターで亡くなったひとの小さな死亡記事を読むたびに、流してますから。最後までしっかりていねいに読んでますよ。そして泣いてしまう。近所に消防署があって、そこもたくさんのひとが亡くなった。だから、そこにいろいろ持っていくんです。まったく、みんなとおなじで、心底からほんとうに、心動かされているし、傷ついているし、喪に服してます。》

ところで、自分は「平和主義者」ではなく、「イスラム・ファシズム」の敵とたたかうことに反対ではないが、今回のようなアフガン爆弾は批判するというソントグと、たとえば、『非戦』（幻冬社）という書物を刊行したミュージシャンの坂本龍一が『朝日新聞』（01.9.22）で、テロリズムは卑怯だが、《暴力は暴力の連鎖しか生まない。報復をすればさらに凶悪なテロの被害が、アメリカ人だけでなく世界中の人間に及ぶことになる》るので、《パンドラの箱を開けてはいけない。本当の勇気とは報復しないことではないか。暴力の連鎖を断ち切ることでないか。》と主張していることとは、同列に取り扱えるだろうか。いや、取り扱えないと思う。それはどうしても渦中に身を晒してしまうような発言をしてしまうソントグと、自らの願望を表明するものでしかない坂本龍一との決定的な落差である。

《もし日本の首相が憲法に基づいて戦争反対を表明し、平和的解決のための何らかの仲介的役割を引き受ければ、世界に対して大きなメッセージを發し、日本の存在を大きく示すことができたはずだ。その絶好の機会を逸してしまったが、まだ遅くはない。》と坂本龍一が書く空々しさは、《人類の叡智と勇気を誰よりも示せるのは、世界一の力を自ら動かすことのできるブッシュ大統領、あなたではないのか。》と書く空々しさと共通している。《日本の首相が憲法に基づいて戦争反対を表明》することなど到底ありえないし、ブッシュに《人類の叡智と勇気を誰よりも示せる》筈がないのを、彼自身よく知り抜いているであろうのに、そう書いてしまう彼と、そんな空々しさを突き抜けた渦中をつくりだして、「こう感じた」ことを容赦なく発言しつづけるソントグとの決定的

な違いがそこにみえている。《断じて音楽は人を「癒す」ためだけにあるなどと思わない。同時に、傷ついた者を前にして、音楽は何もできないのかという疑問がぼくを苦しめる。》から、このような文章を新聞に発表したわけではないだろうが、音楽家なら音楽家らしく、テレビに流される「癒し」の曲などにけっして満足せずに、また「音楽は何もできないのか」などと弱音を吐かずに、本当に音楽では「何もできないのか」どうかというところまで降りていく必要があるにちがいない。そこにこそ、彼の渦中は迫り出してくると思われるからだ。その渦中からなにかを発しなければ、すべてが空々しく聞こえてくるだろう。

2002年2月17日 記